

20答法による保育科学生の入学時と卒業時における自己概念の変化

西垣悦代
(北陸学院短期大学)

[目的]

人が自分自身に対して持つ認識は、「自己概念」(Self Concept)という言葉で表わされ、それは「対象としての自己及び自己の行動、能力、性格などについて、本人がどのように認知しているか」ということで、比較的、永続した自分自身についての考えであるとして定義される。自己概念は、身体的自己、精神的自己、社会的自己、といった相異なるいくつかの経験的自己から成るといわれているが、その中で社会的自己は、対人関係や社会的位置や状況、といった社会的文脈の中で規定され、影響を受けるものと考えられる。たとえば、大学の学生という位置にある人は学生としての自己概念を、学校の教師という位置にある人は教師としての自己概念を多少なりとも持っている。またそれによつて、学生として、教師として行動することにもなる。このような、自分の位置と役割とに基づいて自己規定は青年期以降に発達するものと思われる。

筆者はこれまで、幼児を対象として、その自己概念の一側面(性別概念や「ダイナミクス」)を研究してきたが(42 保育学会)、幼児の場合は測定の方法が間接的にならざるを得ない。それに対して青年は自分を客観視することが可能であるし、内省的に自己を見つめる事も多い。また、多くの場合、人生の選択を行わざるを得ない状況に直面する。このような時期に、青年の自己概念がどのように変化してゆくか、或いは恒常性を保つのか、という事は興味深い問題である。

保育科に所属している学生は、入学に際して比較的目的意識がは、まりしてあり、また卒業後の職業志向も強いとされているが、一方では最近の学生は、目的意識が低くなったともいわれる。彼らが入学の時点でどのような自己概念を持っているか、そして2年間の進学を終えた卒業前にはどのような自己概念となるかについて調査し明らかにすることが本研究の目的である。また、比較の爲に、専門家養成色の強くない他学科(教養科)の学生の自己概念もあわせて調べてみる。

[方法]

対象：短期大学保育科所属の学生94名

及び教養科所属の学生76名

時期：大学1年次の4月及び2年次の12月(ただし、教養科は2年次のみ)

測定具：20答法(Twenty Statement Test)

1953年に米国アイオワ州立大学において、Kuhn, M.H. と McParland, T.S. によって開発された方法で、「わたしは」で始まる記述を20通り書かせるものである。

[結果]

得られたデータを、自己概念の記述内容によつて次のようなカテゴリに分類した。①客観的屬性…性別、学年、所属など ②自己記述…自己の身体的・心理的な特性の記述；性格、容姿、能力、適性、生活習慣など ③対事物・事象関係…自己と外的事象との関わりの記述；職業、勉強、趣味、所有物などに対する興味、関心、願望 ④対人関係…自己と他者との関わりの記述；家族、友人など ⑤その他 結果は表1に示す通りである。

表1 自己概念の記述内容の分類

カテゴリ	1年		2年	
	平均(SD)	%	平均(SD)	%
①客観的屬性	3.09(2.0)	15.4%	3.40(2.07)	17.0%
②自己記述	5.02(2.71)	25.1%	4.31(2.72)	21.5%
③対事物・事象	9.85(2.53)	44.3%	9.31(3.17)	46.5%
④対人関係	2.38(1.31)	11.9%	1.81(1.46)	9.0%
⑤その他	0.66(1.08)	3.3%	1.18(1.98)	5.9%

表1より、1年次、2年次とも対事物・事象関係に関する記述が最も多く、半数近くを占める。以下、自己記述、客観的屬性、対人関係と続いている。客観的屬性と対事物・事象に関する記述は増加し、自己記述と対人関係に関する記述は減少しているが、全体の傾向としては、1年次と2年次とで大きな違いは見られない。

次に各反応を Consensual なものと Non-Consensual なものとに分け、Locus Score (集団準拠指数) を求めた。Consensual な反応とは、広い意味で社会的集団や社会的役割に結びついていて、しかもそれが客観的に証明できるようなものを指す。反応が Consensual から Non-Consensual なものへと移行する点が Locus Score となり、個人や社会的集団にどの程度、帰属意識を持っているかを知ることができる。保育科の学生の Locus Score の平均値は1年次3.73(SD=2.84)、2年次3.62(SD=2.41)、Range は各々0~14.0~9で、大きな変化はなかった。

1年次と2年次のLocus Scoreの相関の値は、 $r=0.60$ で、かなり高い正の相関関係が認められた。なお、教養科の学生の2年次のLocus Scoreは平均2.76($SD=2.64$)で保育科の学生よりもやや低かったが、 t -検定の結果その差は有意ではないことが明らかになった。

次に各反応の内容の検討を行う。保育科の学生の自己概念の中で、特に顕著に共通して見られたのは、音楽に関する記述であった。1年次には68人(72.3%)、2年次には53人(56.4%)の者が音楽に関して何らかの記述を行った。その内容は、④音楽鑑賞に関するもの…好きな音楽のジャンル、音楽を聴くことやコンサートに行くことが好き、など ②音楽の演奏に関するもの…歌うことや楽器を演奏することが好き、あるいは苦手、〇〇の楽器が弾ける、習っている、など ③保育科の授業の中の音楽に関するもの…レッスントラップ、ピアノの進度について、コーラスの時間が好き、など の3つに大別される。1年次では③に対する不安や心配が目立ち、②の苦手意識もかなり多い。2年次では②が好ましく、または苦手だが好きという記述が増加し、不安は減少する。他に、自分のピアノが欲しいといった現実的な記述も見受けられた。

次に多かったのは保育者や子どもについての記述で、1年次には54人(57.4%)、2年次には58人(61.7%)に見られた。総記述数をこれらの人数で割ると、1.67と1.47になり、複数回の記述が多いことがわかる。1年次、2年次とも「子どもが好き」という反応が最も多く、次いで「保育者になりたい」などの記述が多かった。1年次には漠然とした憧れや理想が多いが、2年次では就職と関連して、現実的で切実な反応が多くなる。保育者に適しているかどうかはわからない、保育者になりたいが企業に就職する、等の反応もあった。職業に対する意識を比較する点、教養科のデータを見ると、就職したい、就職が決まった又は決まらない、などの記述は27人(35.5%)に見られたが、職業名を具体的にあげた者はそのうち1人だけであった。職業に対する意識の差はかなり大きいと思われる。

1年次と2年次で最も大きく異なる点は高校に対する帰属であった。1年次には61人(64.9%)の者が、出身高校や、高校時代の所属グループについての記述を行ったが、2年次には8人(8.5%)に減少した。逆に大学に対する帰属は、1年次には20人(21.3%)だったものが、2年次には48人(51.1%)に増加する。入学したての頃は、大学に対してよりも高校への帰属意識の方が強いことがわかる。大学への帰属の記述は2年次では20名中の前半部分に出現し、Locus Scoreに含まれる

が1年次の場合は後半に出現するケースが多いこともこの事を裏付けているといえよう。

1年次と2年次に同じ内容の記述を行った者は7人だけで、79.8%にのぼる。同一記述の総反応数は199で、1人平均2つ以上同一反応をしたことになる。Rangeは0~9であった。同一反応の内容をカテゴリ別に分類すると、①客観的屬性…48(24.1%) ②自己記述…41(20.7%) ③対事物・事象…79(39.7%) ④対人関係…30(15.1%) ⑤その他…1(0.5%)となった。③と①に再現性が高いことがわかるが、表1の全体の分布から考えると特に①の客観的屬性の再現性の高さが著しい。具体的には、自分の興味や趣味、性別、学校、家族、住所などが多かったが、「子どもが好き」も同一反応の多いもののひとつであった。

[考察]

短期大学の保育科の学生を対象に、入学時と卒業前の約2年間の期間を置いて、自己概念の測定を行ったが、反応カテゴリから見た内容の傾向や、社会準拠性については、かなり高い相関が見られた。大学入学という、かなり大きな進路の選択を行った後の急か、2年間で大きく変動することはなく、自己概念は安定して、恒常性を保っている事がわかった。中には不本意ながら入学して来た者もあると思うが、「矢ったものの中にも希望を見出すことができました」という記述もあり、入学時には希望に満ちている様であった。また、卒業前にも2年間を後悔するような記述は見当たらなかった。

保育科の学生にとって音楽は非常に大きな位置を占めている事が明らかになった。進度にハンディがあること、能わが足りたりわかること、個人レッスンがあること、などがその理由かと思われる。しかし2年間を通して音楽、特にピアノを好きになる学生が増加していることは好ましい傾向といえよう。

保育科の学生は入学の段階から、かなり明確に卒業後の進路に目的意識を持っていることが明らかになった。昔に比べるとそのような意識が希薄になったとも言われるが、本研究のデータを見る限り、そのような事はない。むしろ最近のような就職難の時代にも、あえて保育科を選んで入学するという事は、それだけしっかりした決意を持っている、という見方もできよう。そして、2年間の急学によって、いっそう保育者として考える持ちを強めるケースが多いようである。ただ、こんな保育者になりたい、といった具体的な保育者像を記述した者が全くなかった点が、唯一気になる点である。